（3）　第3443号　（昭和24年10月28日第三種郵便物認可）

ハンセン病市民学会教育部会編
ハンセン病問題から学び、伝える
差別のない社会をつくる人権学習

共に生きていくことを模索
ハンセン病問題の啓発書として有用な一冊

宇内　一文

「日本の教育界（学校や教員など教育に携わる者や機関）は、ハンセン病問題における加害者だった」――本書の編者らはこう断言し、教員としてそのことを背負い続ける覚悟を表明している。

本書の編者であるハンセン病市民学会教育部会は、こうした覚悟から出発し、「差別の連鎖を断つ」ことをテーマとして、「ハンセン病問題から学び、伝える」ための「交流」「検証」「提言」を行ってきた。「教育界の加害責任」の自覚と「教育現場における負の教訓を生かした（教育）実践」とを紡ぐなかで生まれたのが本書だ。

本書の執筆者あるいは証言者は、教員だけでなく、療養所の入所者・退所者・家族／研究者／弁護士／学芸員／ハンセン病問題に学ぶ市民・学生など幅広く、取り上げている話題も多岐に渡っている。盛沢山な内容の本書にまとまりを感じるのは、編者らの自覚に基づく編集方針に加え、執筆者や証言者が、差別と別離が強制されたハンセン病問題を通じて邂逅し、隔離を乗り越えて共に生きていくことを模索してきた同志のような関係だからかもしれない。

第1章「差別の連鎖を断つ」は、本書のコンセプトである「ハンセン病問題から学び、伝えること」について、ヒューマンライツ部の活動を通し、人権や平和の問題を生徒と共に考えてきた教員の経験を基に解説したものである。教員は誤った隔離政策に強く関与し偏見差別を助長した加害者であり、ハンセン病問題の「当事者」としての自覚の必要性・差別を取り扱う授業における教員と生徒の関係は、「教える―教えられる」という主客の関係性から脱却し、差別偏見をなくすために「共に学ぶ」ものであること。心の中に「人権のとりで」をつくり、偏見差別を見抜き、それにNOと言える感性を育むこと、そのためにハンセン病問題「から」差別の醜さや愚かさを学び、自分のあり方を問いかけ、人間の強さややさしさを感じ取る学習が必要であることなどを提唱している。

第2章「回復者と交流できた20代が学び、伝えたいこと」は、ハンセン病問題が深刻な社会問題として、過去の隔離政策と同じ過ちを国は犯し、偏見・差別が作り出されていることを鋭く指摘している。

第4章「教育界の加害責任」は、ステレオタイプなきらいがあることは否めないが、戦前・戦後において、教員がハンセン病にかかった子どもや家族を非人間的に教室や学校から排除することに強く加担したこと、一方で人間的にかかわる教員も一部ではいたことなどを歴史的に記述している。

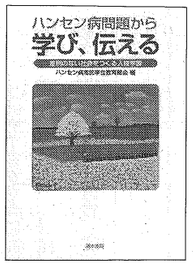
第5章「ハンセン病人権学習で大切にしたい10の視点」と第6章「ハンセン病問題の授業づくりQ&A」は、ハンセン病問題を教材とした人権学習の考え方や、授業の問いかけと授業展開の例などが、写真・資料とともに紹介されている。第7章「ハンセン病人権学習の実践例」は、小学校から大学において実践された人権学習が取り上げられている。どの実践例も教員からの一方向的な授業とは異なり、対象者と共に考えようとする双方向的なそれであり、ハンセン病問題を通して新しい自分と出会うきっかけに拓かれているように感じられる。

第8章「裁判の意義と学校教育が果たす役割」は、国賠訴訟にかかわってきた弁護士の記述で、ハンセン病裁判の意義と限界、教育の加害責任の究明と差別に抗した教育実践の発掘の必要性などについて提言している。

第9章「回復者・家族訴訟原告の声」は、こうした訴訟が現在進行形で展開されていることは、ハンセン病問題がまだ終わっていないことを示している。

第10章「社会教育が果たす役割」は、ハンセン病資料館など療養所という閉鎖的な隔離空間を入所者がどのように生きてきたかを遺すことの葛藤や意義について、「負の遺産」を未来に紡いでいく視点で記述されている。第11章「市民・地域の活動が果たす役割」は、ハンセン病問題の当事者意識を持つ、あらゆる世代の市民や地域による共生のための活動を紹介している。その地域発のユニークな市民活動からは隔離・分断を乗り越えて、つながろうとする強い意志を感じる。

本書は、国賠訴訟や日弁連の検証会議ではあまり深く掘り下げることができなかった「教育界の加害責任」という課題について、（その歴史的検証は「課題あり」と指摘したいが）教員である編者らがその「当事者」として自覚的に引き受け、それを糧にした（教育）実践を通して「差別のない社会をつくる人権学習」を提案している。ハンセン病人権学習の教師用指導書として、この問題に関心ある中・高・大学生から大人までの入門書として、ハンセン病問題の啓発書として有用な一冊であると確信している。（うない・かずふみ＝常葉大学健康プロデュース学部准教授・教育学）



A5判・360頁・2530円
清水書院
978-4-389-50141-9
TEL.03-5213-7151

宮台　真司・野田　智義著
経営リーダーのための社会システム論
構造的問題と僕らの未来

教養教育の必要性を
宮台社会学の優れた紹介書

武田

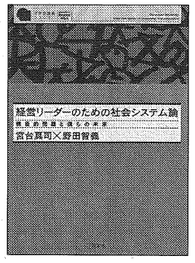
ユニークな立ち位置の書だ。

内容的には宮台社会学の優れた紹介書になっている。「生活世界」と「システム世界」を両極に配置する図式の中で「二段階の郊外化」「感情の劣化」などが議論される流れは、宮台の発言や著作を丁寧に追って来た読者には既に馴染みのものだろう。

それでも既視感は感じない。かつて難解に感じた術語が平明に語られ、概念どうしが相互に接続されるつながりがよく見えるから読書体験は新鮮だ。教育を意識した作りにその理由がある。共著者にクレジットされる野田は経営リーダー育成を目指す至善館大学院大学の理事長・学長であり、本書は特任教授として宮台を招いて実施した授業を紙上で再現したものだ。長年にわたって宮台の愛読者だったという野田が大学院生の知識レベルや問題意識を考慮しつつ議論の水先案内人を務めている。状況に絶望するあまり世の中を速く悪くして限界に至らしめようとして「新反動主義」「加速主義」に共感を示した宮台の姿勢を野田が諌めるやりとりを敢えて見せる箇所なども教育効果が期待できる。世界各国から留学している院生との質疑応答も面白く読めた。

とはいえ、この内容が授業で扱われていることに驚きを感じる人もいるのではないか。現代の日本ではいわゆる教養教育への風当たりが強くなっている。大学で教えている内容と社会で必要な知識・能力との間に乖離があると批判し続けてきた産業界の声を文部科学省も大学側も無視するわけにはゆかず、実務経験者を教員に招聘し、実用的な授業を多く展開するようになってきた。大教室における講義を聞くだけの座学ではなく、アクティブラーニングを導入するようになったのもその種の「大学改革」の一環で、自分で問題を発見解決し、集団で議論する力を大学時代に身につけておくと説明されている。

筆者もそうした時流の中で大学教員業をこなしているが虚しさを覚えることが少なくない。アクティブラーニングでは確かに個々の学生が発言し、各自で議論するが、そこに行動はあるが中身が乏しい。熱血授業のスタイルだけを真似していると感じることも少なくない。



A5判・306頁・2750円
光文社
978-4-334-95293-8
TEL.03-5395-8116

伊藤　潤一郎著
ジャン＝リュック・ナンシーと不定の二人称

思想家ジャン＝リュック・ナンシーの昨年の訃報がまだ耳に新しい二〇二二年の春、気鋭による彼の研究書が出版された。初期から晩年にいたるまでのおよそ五〇年にわたる著作活動を追うクロノロジックな記述のなかに、ナンシーの思想の錬成過程が丹念に描き込まれている。その思想は哲学史を前にした注釈としても練り上げられ、きわめて多重的で複合的な文脈に置かれているがゆえに、まずはその筋立てを解きほぐす必要がある。本書は書名にある「不定の二人称」なる概念を参照軸とすることでそのことに成功している。

著者が折に触れて述べるように、これまでナンシーは彼の著名な共同体論――一九八三年の論文「無為の共同体」以降の著作群――やそれにまつわる諸テーゼを起点として読解されることが多かった。たしかにナンシーは、主体性および共同性を純粋な同一性もしくは何らかのアルケーに見ることの不可能性を指摘することで、伝統的な主体・共同体論の両面、すなわち諸主体の統合による共同体、もしくは共同体の包摂する主体という二つの弁証法的過程を解体したことで知られる。しかし、著者はさらにその背後に別のモメントを見出そうとする。つまり上記の読解のみによっては等閑視されてしまう、主体の起源の手前にいる、あらゆる言語がそこへと差し向けられる「誰か（quelqu'un）」そして「あなた（tu）」の位階の問いである。行動と思考の起源を主体に置く限り、主体ないし共同体の差異化を問うことには限界があるのではないか。問いの現場はもとよりひとりの主体による思考の外に置かれるべきではないか。これらの問題意識が著者のナンシー読解を通じて一貫して見出される。ただし、目的は共同体の思想家というレッテルを「不定の二人称」のそれへと貼り換えることにあるわけではなく、むしろ彼の独自の共同体論の射程を見定めるために、その起源と展開、さらには同時代的な影響関係に光を当てることにある。

以下では、本書の豊かな内容の一部をかいつまんで紹介しておきたい。

四六判・328頁・4950円
人文書院
978-4-409-03113-1
TEL.075-603-1344

共同体の手前、あるいは彼方にあるもの
「誰でもよいあなた」への言語

松葉　類

本書は五章からなり、それぞれ初期思想から晩年へと至る思索過程の各段階に対応している。一九六〇年代、初期のナンシーはエマニュエル・ムーニエとジャン＝マリ・ドムナックによる人格主義思想の語彙をなかば批判的に引き継ぎながら、言語使用による人格と世界との媒介作用を問題にすることから始める。この習一」を提案している。

ナンシーの言語論は、アルチュセールのマルクス論における哲学と科学との「認識論的切断」という読み筋を批判するなかで、「始まり」を簒奪することなき哲学の「なぜ」の問いとその差異化にかんする議論へと展開する。つまり、ナンシーはすでに初期思想において、同一性の手前へとたえず遡行する言語の働きに注目しつつ、実体あるいは実在としての主体や世界の概念化を批判的に見ている。したがってこの思想の流れを追ってゆけば、「差延」という概念なき概念によってこの非同一的運動を問うデリダとの交流も、自然の成り行きであるかのごとく理解することができる。

さらに一九七〇年代のナンシーは、デカルトとカントを読解しつつ、その後の共同体論のたんなる準備段階にとどまらない言語論を繰り広げている。主体はコギトとしての言表行為において逆説的に、このコギトから始まる三元論的図式の「始まり」の手前にいる「誰か」と境を接している。この言語はその後の共同体論において、意味の他化をめぐる「分有（partage）」の存在論においてふたたび位置づけ直される。

一九八〇年代以降のナンシーは、これまでの議論を「意味＝感覚＝方向（sens）」の問題系に取り集めながら、「太陽や動物や人工物」が互いに挨拶を送り合うこと、つまり「不定の二人称」への差し向けを行うことこそが世界のありようであると論じている。初期から論じられてきた主体と世界という二つの主題は、ここへきて諸存在が「不定の二人称」へと差し向けられていることにおいて合流する。最後に、この「誰でもよいあなた」へと向かう言語は、詩人パウル・ツェランが詩をたとえた「投壜通信」と重ね合わされる。この意味で、本書の至りつくナンシー読解に

アンリ・カルティエ＝ブレッソン
プ養
院大
志向
れる
そこ
が教
ない